

# 東工大 資史料館の誕生物語

東京工業大学博物館(資史料館部門) 特命教授 広瀬 茂久

## 1 はじめに

東京工業大学(東工大)は、今から遡ること130余年、明治維新後まもない1881(明治14)年に、国立の東京職工学校として誕生した。関東大震災(1923年)でほぼすべてを焼失したが、その後、日本の近代工業化と足並みを揃えるように、理工系単科大学、そして近年には理工系総合大学へと規模を拡大してきた。本来ならば日本の工業教育史が東工大の資史料館に刻まれていなければならないのだが、創立から132年を経た2013年によく「資史料館」が設置され活動を開始するとともに、「公文書室」を併設することにより、2015年4月から「特定歴史公文書等」を収蔵・公開する準備が整った。ここでは、資史料館や公文書室誕生のいきさつや規模、今後の課題などを紹介させて頂く。

## 2 博物館構想と史料館構想

大きな総合大学では史料館がないことは想像できないだろう。しかし、理工系単科大学の色彩が強い東工大には130年にもわたって史料館がなかった。これは例外中の例外に違いない。科学技術の最先端で凌ぎを削るという宿命から、よく言えば「未来志向」、悪く言えば「前のめり」にならざるを得ず、自分たちの軌跡を後世に残すものとしては、論文(発明・発見)と卒業生しか考えられず、それ以外の試作品や文書類の体系的保存にまでは手が回らなかったのかもしれない。

流れが少し変わったのが、創立100周年の寄附金で百年記念館が建てられ(1987)、その中に寄附者である同窓生の強い希望で博物館機能が組み込まれてからだ。白川英樹博士のノーベル賞や、フェライト、歯車、水晶振動子、光通信などの業績の保存・展示のために、関連文書の収集が積極的になされ、博物館と史料館の必要性が認識されるようになった。博物館の方は順調に準備が進んだが、史料館の方はなかなか日の目を見なかった。この間に百年史(通史と部局史の2分冊)が編纂されたのは驚異的なことで、史料集めに奔走した編集委員の先生方の苦労は並大抵

ではなかったと思われる。実際、百年史の刊行は104年目(1985年)にずれ込んでいる。

## 3 年史編纂で失われがちな一次資料

苦労して集めたはずの貴重な史料も百年史の刊行後は行方知れずとなった。保管のための場所と仕組みがなかったために、編集部解散と共に、恐らくダンボール箱につめられたままいつしか忘れ去られ廃棄されたのだろう。

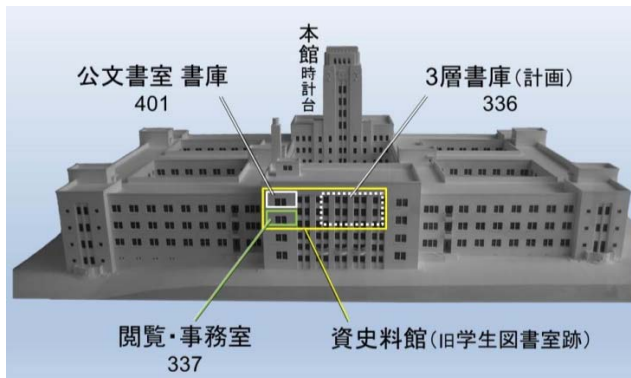
似たようなことは、町史の編纂でも起こると聞いた。50年100年という節目で、町の年史を作るためには、各村や地区から歴史的に重要な出来事の写真や文書類を集めることになる。農村などでは代々村長さんだった家などには貴重な史料が残っており、それを町に供出することが多かった。しかしその史料はほとんど返却されることはなく、散逸してしまったようだ(仮に持ち主に返されたとしても、アルバム等のもとの位置に戻されず、袋詰めのまま別の場所に置かれ紛れてしまった可能性が高い)。町史に採用されたものはまだいいが、そうでなかったもの場合は取り返しのつかないことになる。つい先日、「古いアルバムを見つけたが、一番見たい写真が剥ぎ取られていた」と悔しがっている人たちの話を聞いた。年史編纂と史料館(室)はセットで考えなければならないようだ。

## 4 資史料館の誕生

130年史の編纂も史料集めから始まった。現任教員の負担を減らすために、編集委員4人のうちの3人は名誉教授から選任され、主として通史を担当したが、部局史となると各部局に執筆を頼まざるを得なかった。「資料無しに書けと言われても…」という“怒り”の声が上がった。学長にも話が伝わり、「わかった。今後のために史料室を作ることしよう。ただし、名前は“資史料館”というように、資料の“資”を先につけてはどうだろう。その方が学内の理解を得やすい」となった。

ちょうどその頃、旧学生図書室の跡地利用が検討されていたので、タイミングよく場所が確

保できた。さらに、公文書管理法（2009、2011施行）への対応を求められていたこともあって、公文書室の設置までも含めた計画が一举に動き出し、冒頭のように開設準備が整った。130年史編集委員の多くは、年史刊行（2011）後も資史料館と公文書室の準備に係わることになった。



東京工業大学資史料館の配置図。4階401号室が公文書室の書庫で、その下の337号室が閲覧・事務室及びスタッフルームとなっている。将来的には天井が高い336号室に3層書架を設置し、収蔵スペースを確保していきたい。書庫が広がるにつれ、空調との関係で、夏場の省エネに頭を悩ますことになりそうだ。文書類の画期的な保存技術の開発が望まれる。

## 5 コストパフォーマンスと模索すべき連携

準備にあたっては、先行例を見習いたいと、いくつかの大学（東北大学・東京大学・名古屋大学・京都大学）の文書館や国立公文書館、内閣府公文書管理課などを訪問し、アドバイスを頂いた。種々の制約からそれらを生かしきれないのが残念だが、私共の場合は、経費節減と事務の効率化の観点から、博物館傘下の組織として、資史料館と公文書室がスタートすることになった（事務支援は総務部広報・社会連携課）。狙いどおりにスケールメリットが出せるかどうかは今後の課題だ。

限られた予算と人員で、文書の収集・整理・保存・公開という通常業務に加え、調査研究をも行うのは至難の業に思えなくもないが、魅力的な資史料館であり続けるためには避けて通れない。なるべく早く紀要やニュースレターを出せるようになりたいものだが、現状ではコストパフォーマンスを考えると、学生や教職員に興味を持ってもらえそうな話題を「とっておきメモ帳」シリーズとして発行するのが精一杯だ（インターネットで「とっておきメモ帳」と入力する

とアクセスできるので是非ご覧ください）。

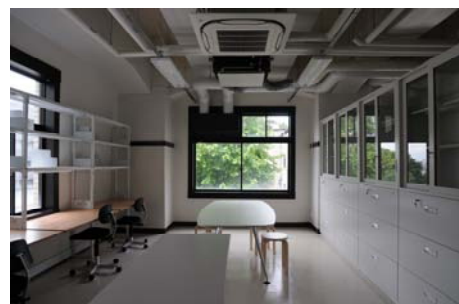
どの文書館にも共通の悩みと思われるが、予算と人員増が望めない。このような状況下では、他部局との連携が不可欠となる。そこで期待しているのが、「学内情報活用センター」の助けだ。このセンターが本格的に稼動した暁には、オンライン閲覧システムの構築とメンテナンスを肩代わりして貰えるだろう。情報収集に関しては、評価室との連携を視野に入れている。評価室は各部局のパフォーマンスを年度毎にモニターしているが、同時に根拠資料として、議事録を含む膨大なファクトデータも収集・分析しており、考え方によっては資史料館のとても便利な出店とみなせるからだ。

## 6 おわりに

130年余りを経てようやく産声を上げた私共の資史料館は、今後、先輩にあたる各大学等の文書館を見習いながら、特色ある文書館を目指して歩いていくことになる。理工系総合大学の姿をしっかりと記録し公開することにより、関係者の精神的な拠りどころとするとともに、明日を切り開く活力の源となるような未来志向の資史料館にしていきたい。公文書管理法もいい意味で保護者になってくれることを期待している。先輩方には、新しい仲間として温かく迎えて頂き、ご指導ご鞭撻を賜れば幸いだ。



資史料館内の公文書室 左奥が湿度調節装置



資史料館内の閲覧・事務室